

「中国」文化形成の多様性と基層性

—栽培体系・食文化体系に関するモノ・物質文化資料から—

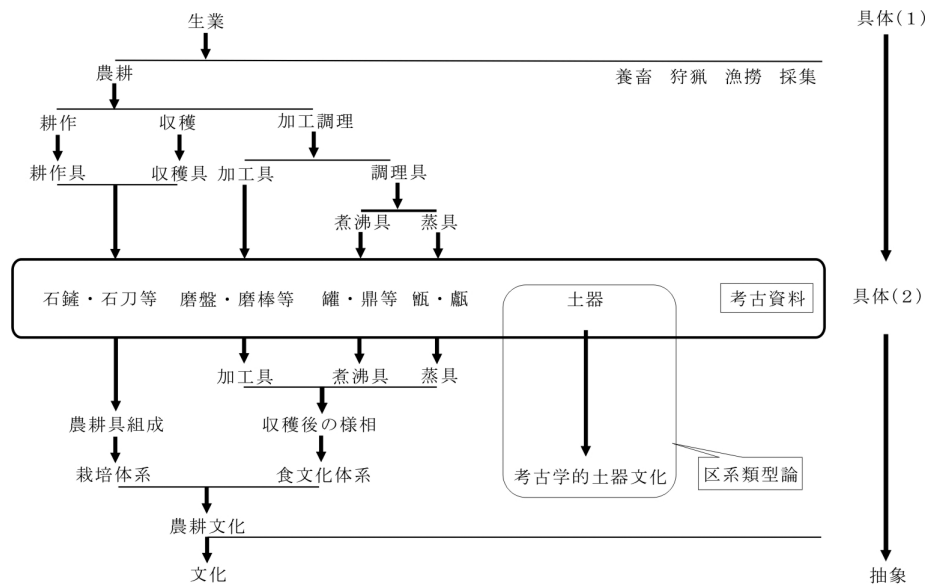
榎林 啓介

1 「中国」文化（形成）論へのアプローチ—多様性と基層性との関係性—

本稿は、物質文化資料を比較し東アジア文化論を再構築する研究班「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」の研究の一端を担うものである。東アジア全体を俯瞰するとき、必ず「中国」とは何であるかが問題になる。ここでは、考古学の立場から、現在の「中国」とは何なのかを新石器時代から古代の物質文化資料を通して考えてみたい。それは、新石器時代についてモノ・物質文化資料から復元するだけでなく、現在の「中国」とは何かを新石器時代やその後の歴史のなかから見出す作業である。

その前に、何を以って文化とするか、文化論を語るか、何を以って文化の指標とするか見ておきたい。周知のごとく、これまで多くの先学が様々な歴史的文化的資料をもとに語ってきた。例えば、南船北馬¹などに代表される南北の違いを論じたもの、陰陽五行説や風水などの思想や世界観から論じたもの²のほか、「中国」・「中国人」という言葉が持つ文化人類学的な意味を論じたもの³もある。この場合には中華的思想・価値観を共有する人々とその文化的広がり定義される。これら中国文化論の特徴は、「中国」を一つの言葉や一つのフレーズで抽象化させて論じようとしたことである。これに対して、G.W. スキナーやW. エバーハルトに代表されるような地域研究⁴は、中国の歴史や文化を一元的に包括してきた研究観とは大きく異なる。少数民族の文化だけでなく、中原以外の都市地域の文化を地域的な中心として見直し、それぞれに特徴が存在することに着目したのである。以後、さらに実地調査が増加し、現在では地域性を強調する論調が主流になっている。ここで注意したいのは、現在進められている地域文化論は、多くが中国文化のひとつとして論じられる傾向にあることである。もちろん、地域は中国文化を代表させるものではないことは承知しているが、地域文化の「地域性」だけが強調されるのは「中国」を前提に論を進める以上、十分とは言えない。このことは、東アジアのなかに位置付けるときでも、「中国」、「日本」という言葉から離れて考えることはできないのと同じである。それは現代に生きる私たちの問題であるがゆえに、現代の「中国」文化全体のなかにも位置づける必要があるだろう。そこで、今回は、こうした文化全体を構成する基層性と多様性に目を向けてみたい。

多様性と基層性とは何か。まず多様性を論じる場合の立脚点から考えると、地域アイデンティティ・社会帰属性や地域史そのものの存在を前提にする場合もあれば、生態つまり自然環境の相違を以って論じる場合もある。あるいは、生態環境に基づく景観や風土の概念を以って論じる場合もある。これまでこうした概念は差異を指摘しやすいために多様性の議論に用いられやすかった。しかし、基層性を論じる場合にも実は同じ論理を用いているのである。国家・民族・言語に関するアイデンティティ、某国史の形成と言った場合にも多様性の議論と同じであることが分かる。つまり、「中国」文化や「中国」史の存在は、こうした全体観を共有しているにほかならない。このように考えると、多様性と基層性というのは単独ではなく、その関係性のうえに用いるべきなのである。



第1図 農耕文化の構造と体系 (楨林 2008 を改変)

2 栽培体系と食文化体系に関するモノ・物質文化資料—抽象と具体—

それでは、多様性と基層性の関係性はどうすれば論じることができるのか、方法論上の問題を考えてみたい。多様性や基層性は全体のなかに位置づけるべきと指摘した。ならば、資料は分析をするときに全体のすべてを網羅できるほうが良い。しかし、恣意的なものでは意味がなく、生活に密着した文化や社会のあり方を表わしているほうが、普遍性が高くなると考える。これは、今回のテーマであるモノ・物質文化資料においても意味があることであろう。そこで本稿では、基本的な生活を成り立たせる生業、とくに農耕を取り上げる。具体的には「農耕文化の構造と体系」の概念に立脚して、それに関するモノ・物質文化資料を用いて多様性と基層性の問題に取り組んでみたい。この「農耕文化の構造と体系」とは、筆者がかつて農耕文化を行為と道具の関係に着目し体系化したものである(第1図)⁵。栽培の過程だけでなく収穫や調理の過程、そして食べることまでを含めて考え、栽培体系と食文化体系とに概念化したのである。主穀物を栽培するすべての行為とその道具を栽培体系として、収穫した食物をめぐるすべての行為とその道具を食文化体系とした。これにより、行為と道具の関係に論理的な道筋をつけようとしたわけである。

3 「中国」文化(形成)論へのアプローチ—隠れた歴史的基層性

もうひとつ重視した観点を述べておきたい。現在の「中国」文化を考えるときに、いま見えている／残っているものだけではなく、歴史性を取り上げるのである。現在に展開する文化は、過去の歴史の積み重ねの上に存在するものであることは自明である。そうだとすると、現存する文化的行為や物質文化資料のみを対象にしてしまえば、すでに消滅・変容した多くの文化的要素を見落としている可能性がある。捨象されたさまざま歴史的な事実や文化像があり、各時代に形成された歴史的基層性が本来内在しているのである。これを「隠れた歴史的基層性」とし、それが何であるかを考えてみたい。そのためには対象資料の時間的広がり調べる必要があり、この点においてもモノ・物質文化資料がもつ分析要素の普遍性が有効になってくるのである。

4 「中国」文化形成の一元論と多元論

ところで、「中国」文化の形成について、考古学的にはどのように論じられてきたのであろうか。中国

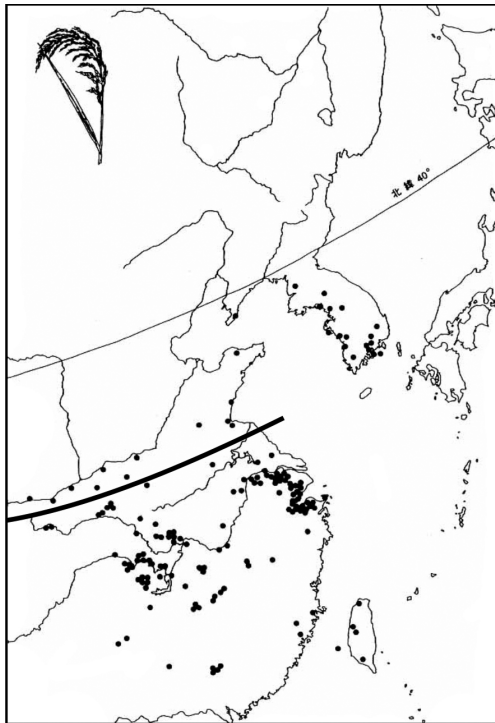
の新石器時代から古代についての中国文化論・中国文化形成論にはふたつの考え方があった。それは1970年代から90年代にかけて盛んに議論された、一元論と多元論である⁶。一元論とは、まず黄河中流域付近に中原文化が勃興し、その後周りに拡散し地方文化が文明化され発展していくというシナリオである。多元論とは、各地域には多くの中心となる文化的核があり、それが徐々に中原に収れんすることによって、中原文化すなわち、文明が形成されていくというものである。これには、1970年代までの発掘調査が数少なく中原的世界の優位性を強調しやすかった時代から、経済発展に伴い全国的に発掘調査が増加し、地域毎に豊かな考古学的文化が存在することが知られるようになった時代へと変化したことが背景にある。ただし、いずれにしても「中国」文化・文明は中原を中心として形成されたという基本認識は同じである。また、矛盾するようだが、一元論であっても地方文化の存在は認められており、その点において文化的多様性は強調されている。しかし、地方文化は中原文明の影響のもと成立するのであることが多元論と異なる。つまり、この一元論と多元論のいずれにしても、地域は中原文化形成を構成する文化的要素なのである。この点は問題を残しており、地域が「中国」における地域史として埋没してしまう可能性がある。それがゆえに、地域性や多様性を強調するだけでなく、全体を視野において位置づけることが求められるのである。

5 主要栽培穀物と農耕具からみた栽培体系の多様性と基層性

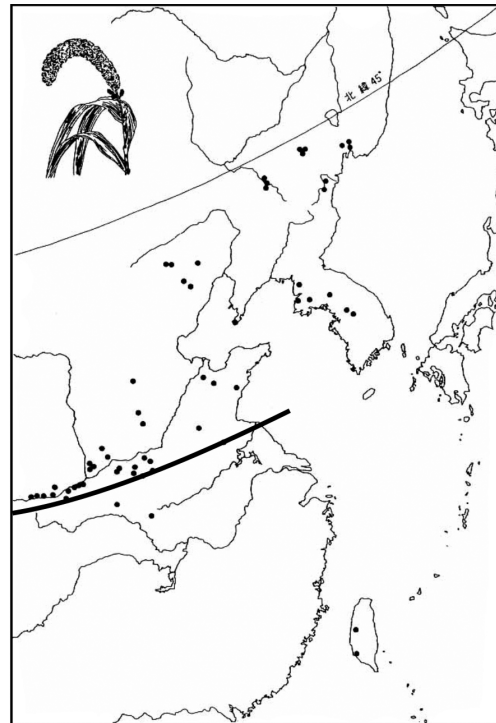
農耕文化から多様性と基層性を見る前に、まず自然環境について言及しておきたい。自然環境を構成する気候、地形そして動植物を含めた生態系は、人間生活の場そのものである。また、自然環境は変動をする。温暖期と寒冷期を繰り返すことで、気温や降水量も変化し、あわせて地形環境や生態系も地域によって特色を帯びる。中国大陸には、南北にも東西にも広範囲な領域を持ち、気候区分でも熱帯・亜熱帯・温帯・亜寒帯などのさまざまな気候が存在し、こうした気候帯の違いに基づいてさまざまな農作物が作られている。周知のことであるが、華南・長江流域では基本的にイネを栽培し、華北・黄河流域では現代ではコムギ、コウリヤン、トウモロコシなどを栽培している。これらの違いは明瞭な境を以って見られる。その境となるのが、北緯35度付近を通る秦嶺山脈淮河ラインで、年間降水量1000mmを基準としている。この境は過去1万年間の気候変動で南北に移動はするものの、その違いは常に明瞭である。つまり、栽培に適した穀物が異なるのである。こうした違いは、新石器時代から存在している。

新石器時代遺跡出土のイネ遺存体；アワ遺存体の分布図を見ると、現在の秦嶺山脈淮河ラインを境にして違いがみられる（第2図）。イネ遺存体では、このラインの北側にも出土の分布が広がっているが、気候条件が南北に変動しているからである。基本的には、この秦嶺山脈淮河ラインを境に、南はイネ・北はアワを作っていることになる。つまり、栽培穀物は、「北と南」で違いがあるのである。

前述のように筆者は、農耕文化を栽培だけでなく、収穫後に加工調理し食するところまで一体化して捉えるべきだと主張し、栽培体系と食文化体系という概念を導入しながら、農耕具・加工具・調理具の分析を行ってきた（第3図）。これには大きくはふたつに企図するところがあった。日本の場合にはおもに稲作に特化した生業体系を形成してきた地域であるが、中国の場合には自然環境の多様性もあって地域によりさまざまな栽培穀物を栽培してきた。しかし、穀物を栽培しているからという理由でどんな穀物を栽培していても「農耕文化」という同じカテゴリーのなかで認識してきた経緯がある。確かに、穀物には、それぞれに気候・土壌環境に関する生育条件の特性を持つことから、それを利用する人間の文化や社会形成にも違いがでてくる。例えば、「稲作文化」、「麦作文化」などがそれである。ただし、中国の世界では、異なる穀物を栽培化し社会を生成してきた地域が複数併存し、しかも互いに影響関係にある。こうした世界を理解するために、「稲作文化」や「麦作文化」のように議論の最初から区分してしまうのは、実態と乖離してしまう危険性があった。そのために、農耕文化の要素を抽出し体系化を行った



イネ遺存体の出土分布図



アワ遺存体の出土分布図
(太線は、秦嶺山脈淮河ライン。)

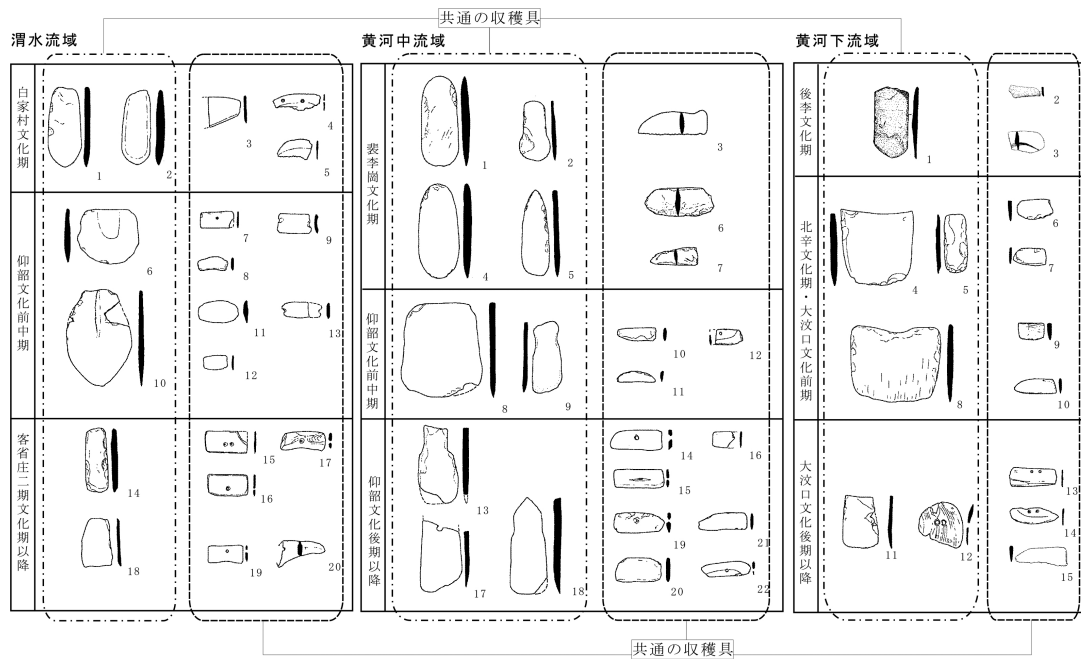
第2図 秦嶺山脈淮河ラインと穀物遺存体の出土分布 (甲元 2001 を改変)

のである。そのうえで、もうひとつの企図するところは、体系化する際に農耕文化の要素と実際の資料と理論的に繋ぐことであった。つまり、抽象と具体を関係づけたのである。これにより、対象資料を個別に分析してもその結果を上位概念のなかに位置づけることができるようになり、具体的な資料である物質文化資料／考古資料を分析することができたのである。

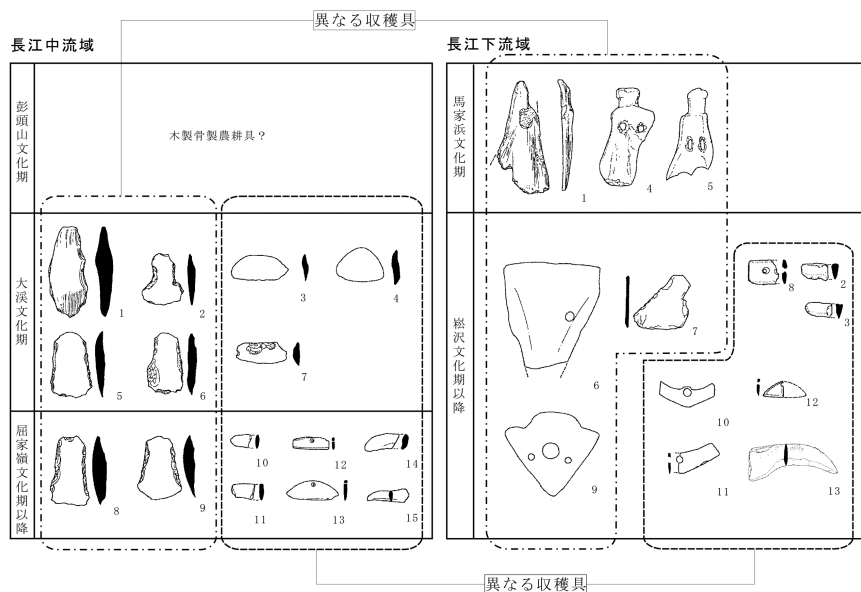
その後、栽培体系に関わる農耕具の組成とその変遷から、黄河下流域・中流域・渭水流域では同じ栽培体系を共有し、長江流域では長江中流域と下流域とでは違う栽培体系が独立的に形成したと結論づけた(第4図左)。考古学的土器様式文化の領域ごとに農耕具の分類と編年を行い、その後土器様式文化を越えて比較したのである。このとき重要な視点にしたのは、物質文化資料／考古資料の一つ一つを見ると類似性や差異が見られるが、ここではどのような耕作具を使って耕し、どのような収穫具を使って収穫をするのかという農耕具のセット関係に注目をしたことである。つまり、農耕具のセットから栽培技術体系の様式を導きだとうとしたのである。結果、渭水流域、黄河中流域、黄河下流域では、それぞれに考古学的文化は違うのだが、共通の耕作具と収穫具が存在したことが分かった。そうすると、それら3つの地域に共通する栽培体系があったと解釈することができる。黄河流域型栽培体系としても良いだろう。稲作地帯とひとくくりになされてきた長江流域では、これとは違っていた。長江中流域、下流域とでは農耕具そのものが違い、相互に関係し合い栽培体系が生成されることもなかった。自然環境と栽培穀物では共通するが、異なる栽培体系があったことになる。断わっておくが、ここではいつ田植えをしてどのような水田をつくるのかという稲作の行為を指標にしているのではなく、農耕具に関する物質文化が異なるという次元で区分をしている。

6 新石器時代の各農耕文化圏と戦国時代の諸侯国との比較

このように新石器時代後期になるころには、黄河の下流域から渭水流域にいたる広い範囲でおおむね



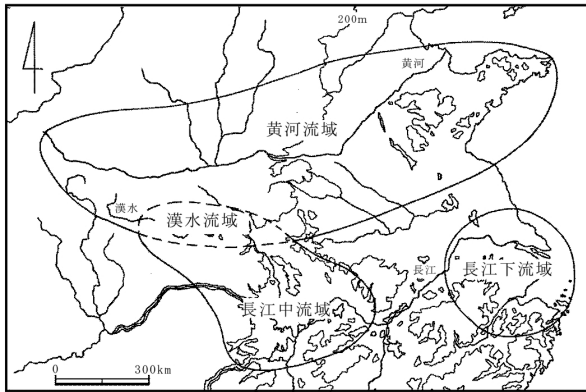
⇒共通する栽培体系（渭水流域・黄河中流域・黄河下流域）



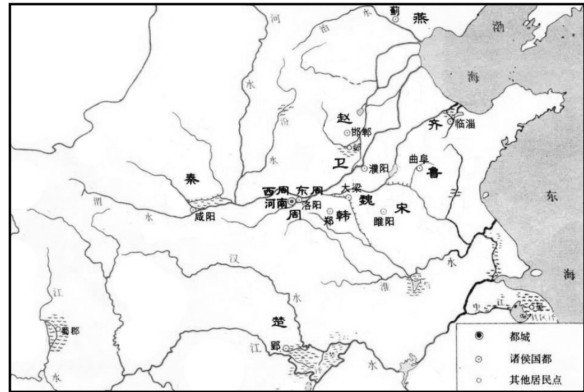
⇒異なる栽培体系（長江中流域・長江下流域）

第3図 中国新石器時代における栽培体系（農耕具）の変遷

共通の栽培体系が形成され、長江流域では長江中流域と長江下流域との二つに大きなまとまりが形成されてことがわかった。これらは、栽培体系に関する道具と考えられる考古学的な遺物の分析結果である。このことが歴史的に何を表しているのだろうか。次にこのことについて考えてみたい。考古学では遺物や遺構の年代を明確にして、その時間的な変化を追うことで歴史を論じる。もし、遺物 A が時間を経るごとに出土しなくなった場合には、それ以降の時代については基本的には研究対象としない。しかし、遺物 A が出土しなくなっただけであり、その道具は別の形の道具にとって代わられたかもしれない。ただ、その別のものとの関係性が明確でない場合には実証的分析はできない。このことから、考古学的方法論上、異なる遺物を歴史的に関連付けることにはまだ十分な議論があるわけではない。こうした方法



新石器時代栽培体系の地域性
(槇林2008を改変)



戦国時代の国の分布
(中国地図出版社1990を改変)

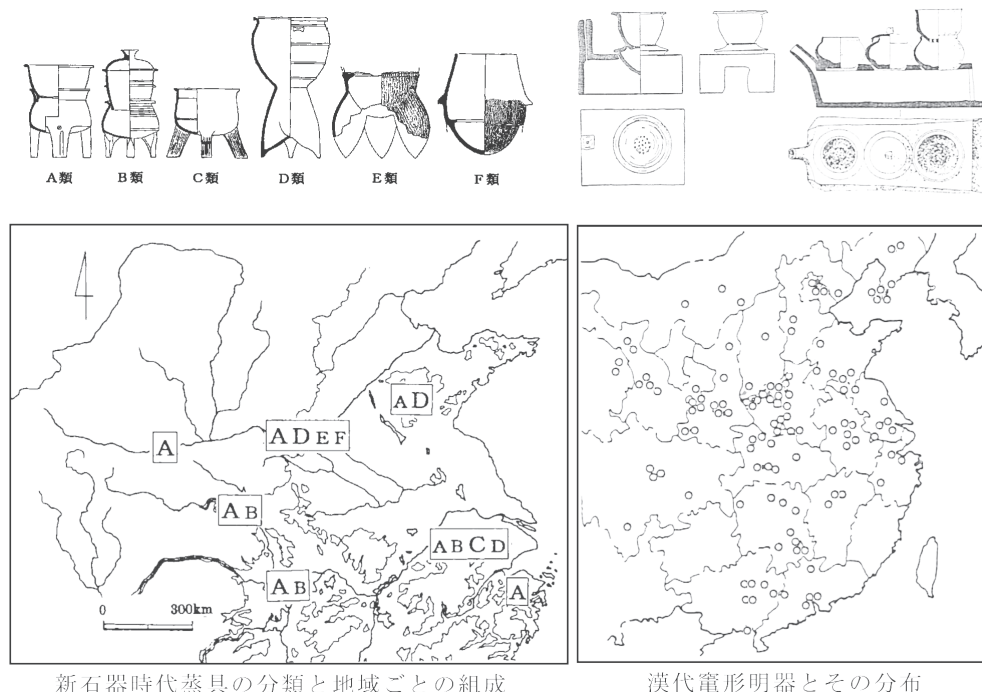
第4図 栽培体系の地域性と戦国の国

論上の未熟さを念頭におきながら、農耕具が表す新石器時代後期の栽培体系が後世の何に続いていくのか、あるいは後世の何に名残りが残っているのか比較を試みた。

すると、戦国の諸侯国の分布との類似性に気づく。この時代には中原を中心に多くの諸侯国が存在し、諸侯国間での争いを経て、秦が台頭することで統一的な国家が成立する。ここで注目するのは、諸侯国の数とその分布領域である。黄河流域には非常に多くの数の諸侯国が存在し、長江流域では楚と越という二つの大きな領域があった(第4図右)。基本的にこのふたつが黄河流域の諸侯国と交渉することになるのである。そこで、農耕文化における栽培体系の様相に戻って再度考えてみる。農耕は、集団・共同体を単位に行う。栽培は家族単位で文化的に独立しているのではなく、政治的にも技術的にも共有したひとつの集団・共同体が行うのである。つまり、栽培体系のまとまりとは、この集団・共同体が見えている可能性がある。さらに、同じ栽培体系を共有しているということは、複数の集団間の関係が濃いということにもなる。そうすると、黄河流域で形成された共通する栽培体系とは、黄河流域で農耕を行った集団が、新石器時代の歴史的過程のなかで栽培技術とその道具を共有した結果であると言える。同じ栽培穀物と栽培技術を共有する集団・共同体は、互いに結合・解体・再編という社会的動態を経て、戦国時代に至る諸侯国の世界を形成したのである。いっぽう、長江の中流域や下流域の栽培体系の排他的な様相というのは、そのまま楚や越へ移り変わったと想定できる。道具に類似性が見られないことは、集団単位での相互交流が希薄であったことを示し、こうした関係がその後も継続したのである。栽培体系における歴史的基層性はこのようにして出現し形成したと考えることができる。ただ、なぜ、こうした歴史的基層性が議論されてこなかったかは、その後の漢王朝や唐王朝以後の変化に伴い徐々に同時代の人々にも見えなくなってきたからであろう。その意味で、これを隠れた歴史的基層性と呼ぶことができよう。その具体的な解明については今後進めていきたい。

7 調理具から見た食文化体系の多様性と基層性

次に、食文化体系の多様性と基層性を見てみたい。収穫したものを食料として口にするまでには、加工したり調理したりとさまざまな工程を経る必要があり、同時にさまざまな道具を使用する。この行為と道具の関係を、筆者は食文化ではなく、食文化体系とした。つまり、食文化体系とは食事行為とそれにかかわる道具の体系である。ここでは、火を使って調理する厨房の道具に注目したい。かつて、穀物を調理する煮沸具や蒸具の種類と時期的な変化を整理したことがある⁷⁾。そのなかで蒸具は、穀物を調理する道具として東アジア史においても重要な道具である。現在、蒸す時には、竹製やステンレス製など



新石器時代蒸具の分類と地域ごとの組成

漢代竈形明器とその分布

第5図 食文化体系の多様性と基層性

の蒸籠を使用する。新石器時代では、もちろん木製や竹製の甑もあったと思われるが土製のものを主に使用していたことが分かっている。甑はそれだけでは機能せず、煮沸具の上に載せて使用する。つまり、煮沸具が無ければ蒸すことはできない。また、中国には甑のほかに甗と呼ばれる蒸具がある。甗は煮沸する部位と蒸しものを入れておく部位とが一つの容器に設けられ、それがひとつあれば蒸すことができるものである。中国新石器時代にはこうした蒸具が多く出土しており、各地で様々な形式の蒸具があることが分かっている⁸（第5図左）。さらに、重要なことには蒸具の種類を複数もつ地域が存在することである。蒸すことを目的にしているならば、一種類の蒸具で十分に役割を果たす。しかし、異なる種類の蒸具が併存したことから、集団の文化的習慣が異なっていたことを想定できる⁹。それには社会階層による所有する蒸具の違い、もしくはハレとケで用いる蒸具の違いが予想される。さらに視野を広げると、黄河流域では多種類の蒸具を使用する地域と一種類の蒸具を使用する地域が存在することに気づく。栽培体系では同じ体系を共有しつつも、蒸具のあり方は地域によって異なる。つまり、食文化体系の側面ではそれぞれの地域で地域性を保持していたことを表しているのだろう。

こうした食文化体系の多様性を、前章と同様に後世の様相と比較してみよう。ここではやはり戦国から漢代にいたる時代に注目したい。このころになると、煮沸具や蒸具はそれら単独で火にかけて用いるのではなく、竈の上において使用するようになる。古くは新石器時代中期からすでに出現していたが、漢代のころ急激に普及していったとされている。実際には実用の竈の出土例は少ないため、副葬品として製作された竈形明器をもとに分析した研究がある。これらの研究によって、竈形明器は、現在の中国全域に出土していることが明らかになっている（第5図右）¹⁰。竈の前面に火口があり後方に煙突を備える。その上面に鍋を置いて調理できるようになっている。鍋には煮沸のみ行う鍋と甑を上に伴う鍋とがあり、煮沸と蒸しの機能を備えていた。中国の調理具は、新石器時代にはもともと前述の土製の煮沸具や蒸具が単独に使用されていたが、竈と鍋・甑のセットに変化し広い範囲に普及したのである。

そこで、その変化がなぜ行ったのか、どのように普及したのかを考える必要がある。なぜならば、食料の種類とその分布範囲とは異なるからである。黄河流域ではアワ・キビ・ムギ類を栽培し、長江流域

ではイネを栽培しながらも、中流域や下流域とでは異なる栽培体系があることはすでに述べた。一方、竈はこうした栽培体系が違う領域を越えて、中国の広い範囲に広がったことが指摘できる。竈を見ることで、中国文化形成におけるの基層性の一端を論じるため指標になりえると言える。

8 まとめ

以上をまとめると、新石器時代後期に黄河流域・長江流域を中心に、現在の中国につながるような基層性が形成され始めた。それは、農耕を基盤とした社会が生成される過程でより広域的な地域のつながりを持ちながら相対的に形成された。その後、王朝交替を繰り返す過程で、中原地域を中心にしながらも、周囲が王朝の領域に組み込まれたことで、より広範囲に中原的な文化要素が拡散していくことになったのである。現代につながる最も大きなイベントは漢帝国の成立に求められる。

そもそも、多様性と基層性が生み出される前提に自然環境の多様性があった。そのひとつに、栽培穀物の生育条件の境となる北緯約 35 度付近の秦嶺山脈淮河ラインがあげられる。これを境に、基本的には北側がアワ・キビ、そしてムギ類が、南側ではイネが栽培された。しかし、栽培に関する道具に関しては、こうした違いは当てはまらない。とくに同じイネを栽培している稲作地帯である長江流域の少なくとも下流域と中流域とでは異なる栽培体系が存在していたことがわかった。こうしたあり方というのは、自然環境、とくに地形環境に起因すると想定される。それは、政治・経済の移り変わりに反して、現在の中国でもまだ見られるものである。いっぽうで、食文化体系に関わる調理具や厨房施設は、竈に代表されるように現在の中国のほぼ全域に広がり、使用され続けているという文化的な共通性をもっていることが分かった。これは、自然環境に由来する栽培体系や穀物の違いとは密接には関係しない。コメを食べる地域であっても、ムギを食べる地域であっても物質文化から見ると結果的には共通の道具を使用していたことになる。

日常生活に関連する生業体系とその道具を歴史的に分析することで、現代の中国文化を構成する歴史的な基層性と多様性の一端を、その関係性のうえに考えてみた。これにより、現在の「中国」文化を構成する全体論をも展望することができるのではないかと、今後も議論を続けたい。

参考文献

- 1 福永光司 1996 年『「馬」の文化と「船」の文化』人文書院
- 2 渡辺欣雄 1990 年『風水思想と東アジア』人文書院
- 3 瀬川昌久 2004 年『中国社会の人類学 親族・家族からの展望』世界思想社
- 4 G.W.Skinner 1977. *The City in Late Imperial China*. Stanford University Press.
W. エバーハルト (白鳥芳郎監訳) 1987 年『古代中国の地方文化—華南・華東』六興出版
- 5 榎林啓介 2008 年「中国新石器時代における農耕文化の形成と変容—栽培体系と食文化体系—」『東アジア文化構造と日本的展開』北九州書店
- 6 佟柱臣 1986 年「中国新石器時代文化的多中心発展論和発展不平衡論」『文物』第 2 期
嚴文明 1987 年「中国史前文化的統一性と多様性」『文物』第 3 期 文物出版社
- 7 榎林啓介 2003 年「中国新石器時代における甗の基礎的研究—黄河・長江流域を中心にして—」『先史学・考古学論究』IV 竜田考古会
- 8 榎林啓介 2006 年「中国新石器時代における甗の成立と展開—一体型甗と結合型甗」『古代文化』第 58 巻第 3 号 古代学協会
- 9 榎林啓介 2005 年「中国新石器時代における食文化体系とその変容—蒸具の多種化—」『中国考古

- 学』第5号 日中考古学会
- 10 渡辺芳郎 1987年 「漢代カマド形明器考—形態分類と地域性—」『九州考古学』第61号 九州考古学会
- 渡辺芳郎 1993年 「中国におけるカマドの変遷と地域性—カマド形明器からの検討—」『古文化談叢』第29集 九州古文化研究会